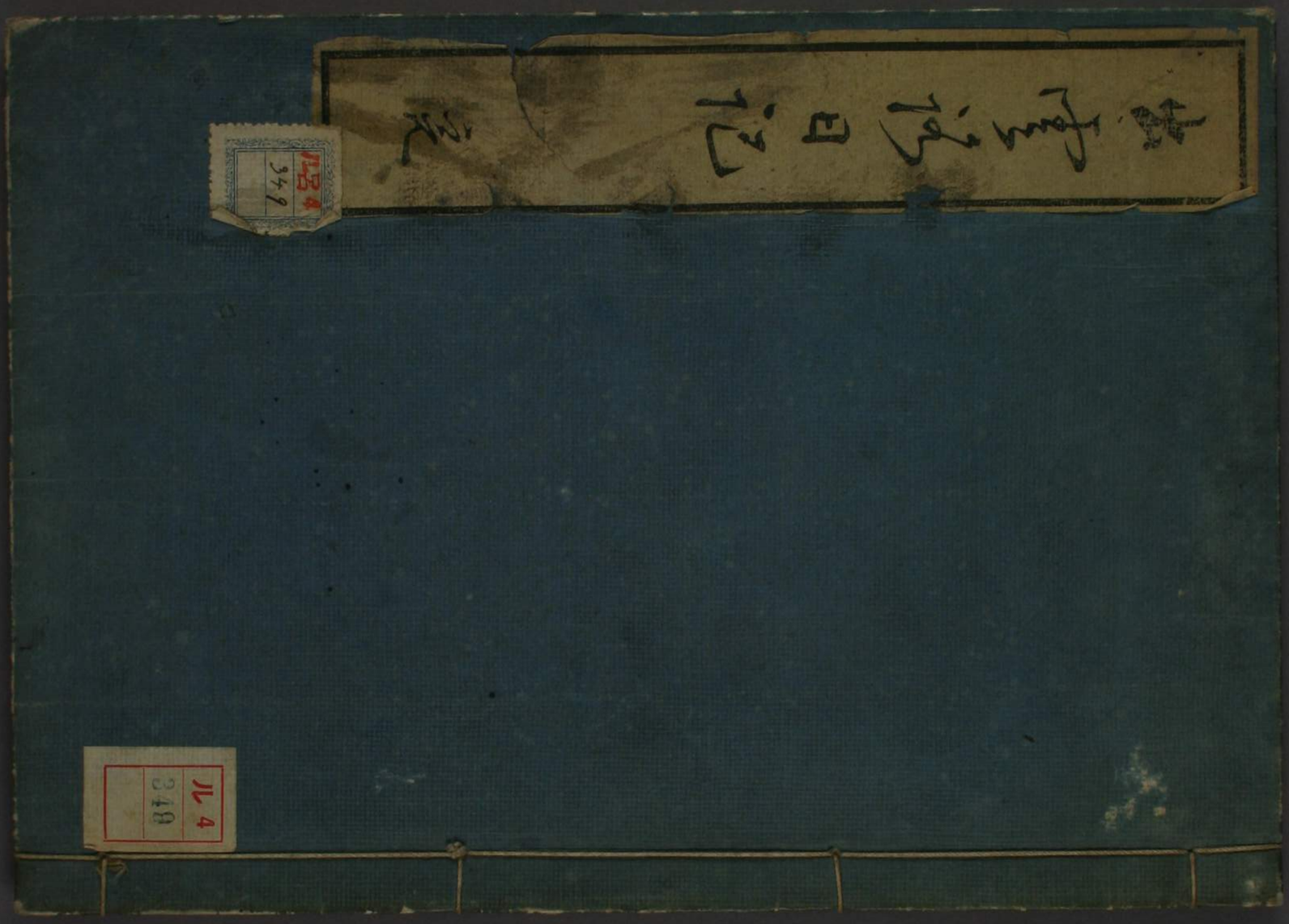
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



ル呂 4
349

松屋藤井大人著

出雲路日記

此日記はいにしへの文の旅路の日記にならひてたゞ
しくかなもてかきたれば初学のためにはいとよくちかひたるべし
よまるべしかれ文は記のみならず物の学びにもいと書にくし

糸坂三書坊合梓

出雲路日記

きづきのおほ宮にまうでんとかねて思ひわたりてとしごろ
たゞならずそのことをすぐしきつれどもことしは
くさぎみる月のくれがたなりゆくまにおほやまの雪も此
ころはきえつくべくやよひのころのとほどなるべきつひになんよ
たよりありしほどなりければさきだちつかはしけむとて乃
むかへの時となりてそよといはせのかへでの見まくあるを
うまやにゆかむとするあさしも出雲路にかよひゆかむ
とて大田宗斎三木正情らにもさそはれてゆかむなどいひけるによび
まじりてあり奥あるさあのが墨のもとにてつくまじりしど
はらからなるもやうやうしくしるしけるとこそに

郡にうへ見てふ[illegible]あるうの暁おきてずさごとを[illegible]のてうど
ゆきもちてゐ荷ゆ清ゆひうとひると見つくとうう[illegible]ぐあどひ
かごといつ今やうゆ乃見とものいかえとあまどからうり御社よ
まうで面ろとゆして石ひて成おあけでけこ高たどく
しに模つうみとゆへ逝てくゆく

いちこ花をえすつうひと老ごとにおひ病てうち
つまてゆく年もあるはけうといひて見めづこせばやる乙とや
紀そめうるこゆ見ゆ未どとゆ感見ざこひごうらうとし紀
好くまうに部流と用くなりぬやうく心づまりて思へ湯
逝こ孫の出こちいそだ行まだ見てこれうまたかこひかく
べきゆどこゆおゆ見ゆこうまどせんうこあ[illegible]部ゆこうとさなきこのく

世うこうこだつ打枝などこわうまてハいふ心やそくうゆ高ゆ
ゆへゆくうて高こ雲ゆ見ゆ通ゆさ物ゆとて思ひなん赤のゆ
逝こゆこうて百年ゆ心とでいこと心づうひいやこうゆは赤
ゆ心とぞおひ用ゆうくごといつおこう雨ゆる今川の里こうれ
ちこにてひこうこいひとうとこうこ江田ゆなゆがこうと来
むこうこ川のこうこゆゆもゆちこみあまこ来てかここ長出こうこ紀
あうどなどこれゆこゆ弓剖こうこ所まどこうこ人ハ志げこうえゆぐ
まこうび出てゆこにいゆこくうこうこ成ゆ時こうみこうこゆ出ゆひの
里にいたりてやがる
廿二日ゆこうこ面ゆこうこあゆ雲ゆ[illegible]ゆこうれく
いまたあこいうこたこゆこうこ出てゆこうこうここうこうこうこ心ゆ

まちはの中に山海とりこめたるこころばせ
めるるのとうちながめくふ雪たちかさなりてはるる梅はうちるいとせ
ばくなりはまりてあるどうひてうちうちゆく人どもこゝにとまる
ゆくさなかをこゝはうつくしうこゝろあるかたちにて夕くれ
人世はなれうてうもやはとまるにやどるなかいみづうみやはば
つるけしきをてゝ神んとするにあるで心ありてきれなるが光やし
きかくこてからくひすむひとはのもびきわたれるあるも
てなりてうつれ
廿三日あけぐるに光ありてこゝろうこゝろ
馬どもものいとゆるこゝろあるあるにさこゆくそはまてまやはもむ
ゆ、あのまてはきくつるこゝとなりてたれば思ひよるくはたは

日はたらきなかれたりたら出て川をひはるをゆくくるある
くるぶをみるかほこゝ山川のたゝうゆく岩藤ハみはちをにゆく
しるこの川はもゝくふかはておつるまでとみるまはりてゆくとはに
勝山はは里にいるうるやはとき出てたのみこゝにあはつまなんと待
はてさはをはるいるあるてあるからうゆく人どもこゝうして
こゝはは小人世にはぐもうてなんといくしてはぐはるやをうひ
出てゆくあいつくなるゆはをはつるひなり谷川をいと大なる岩
どもあまるいるを林代のこゝみて見てこゝうゆくひるもかこゝそこゝ
こゝひて
いくつはは世にあるこゝはるをみてはうるこゝはこゝなるこゝみやあるこゝ
やはは川見わるこゝはこゝはこゝはこゝはこゝはこゝはこゝはこゝはこゝ

うつし見る山水やさと川くおもむきはのこりなくぞ志り
ぬるゆくさきに山かさなりてちに雲しろく見ゆるたえまあり猪山
のうまやりて志ろひるとのこれにぞたえまに山とぞりしてはしまひつお
より霞清て見え侍らざりしまたのしかり侍りけれど日もかたぶきぬ
さむかりしかのよはすぢの西風ふきゐあれなれなやうる山は
雪みゆる里とほし新庄の町のうさるに山路かかる雪のえ
く細りしみそのせるをむかひのしるし志るべの所をゆきしよ
からしるとやおもひ出て

志るべのちに見ゆるむかしは寒の雪ほとりの空の西都
出わかりてちちのはてしとおほひなる夕日に
おろくとかかやいて山は鏡をかけたるがごとく見ゆる所々め

ぼくしたのしきなりけりとおもゆく所は四十八まゐりとて世の人は
おそれしけりいふみちぞかし

名みちろうべなりけりて山ては世にしられ川ぐら
とりえおりさて根井原あやかり橋まる
廿四日根雨溝口といふ川うちわたりて代々屋といふ
いまでしげりやまくぬさなつけとる人をやどし
家とかならぬとあくばおうちもうのしうへたるぞよき
はりとのと海屋ありまでこくもあの方にもゆくなんとひさる
米子より松江まで舟よりゆくべきやうとは名たる
所やうるとしたちより見んとくなりにさてゆくひの川と
いふ川あり板橋かけりなかは百八十間なりとやぞせばき板

ゆくひろは継ちしなればいとくおしみ遊こそは面白りし山々は
雲はれみをおち来くはみしうふくなかれのおもはゆる糸の
おもくなればつぶりとおちはまたらんよりはおちくべきやうなし
かゝる道はそのにくなくやあらんと思ひやさしくひめまどさらとて
いさらしといひてこゝらめへ里なんに人まろうねぞおそろしき
と詠んでてしなく行くまゝてきせ旅人と跡といのの杖のもと
末ゆりわひてぞわたるなかにまへいつでうはらりをと思ひ
てころはさわくをおもひくしづえつゝ好てむらひの岸ちかき
ぬくと見ゆるにをきていふめるらむしてすゝうとくぬらましは
いふんかたなし

川ときまし旅ねたさけはまうりせば我を伴ふる身とぞなる

まして旅どもはいとゝわびしかりけるかれの里につきてやどり
ぬれどもかれのうちしることもやおぼいさめし

雲は旅の夢はなにかし旅かしまあらはわたるはかなしかば

廿五日むら雨はれて風あらねば船このまゝで川か
ひきておるにもみえしきより大山をこえ見えて

いづれは海こそ出て見ればうちのやおほ山の裾こそきよげにて
山はさくこそのいよいよ高くもの浪にて新の見ゆるを

あづま路は富士の山にみえて富士の高ねやわれは海の
うつりぬることはわすれがたくおほ山なりあらんと思ひ
やらまくかへる浪にうれしき心ばへし

わが背子がいづこぞちへの浪まくを山のかすかなれし

申はなれて松江の里につきぬれば、けふ一日まちこがれたりしかの
うらすだれ、人やどしの家あまたがる、なだたら出て、海はお
だやかなるに、ほのぼのとあけゆくみのうきをひとつにあつめたるはこ
いとをかしうこそ。とりあつめたるもあはれなり。
とぶみゆるゆふ雲にやどりたかはまぬ
廿六日　こゞうみはかぜとりとゆく道なれば、あまたの海ごとのおきに
はあまの釣舟どもつどひたるこそをかしけれ。
すゞたつるあまにたちまじりあまのみづうみ沖よりふねはわたるこゆ
ふは艫やへつゝとこそ松江にあたるこゆなりけるゆきかへりいと大
なる河あり。て、まことはせゞにはなれたるとこゝにはなれたる
もくこゆさんどもたくさんかへ入れるに小さきふねは

中はなれて松江の里うつきあり竹ぐしにさしたるあゆ
うらすばかりなるあゆとあそびがるつまぐなどだにて泳はわ
たるを見あるくほかりみのいきかひにあてつくるとたるはけるす
いうそ〳〵いと極うるはしてるのあり心とり志うを人とあれくもるを
とぐみゆるゆゑ書にやがりにかへるぬ
廿六日こぐうみはかりとゆく道まあるあるは海だりの方泥きに
はあ〳〵絲どきつだりふこしたるとかはは
すぐにつるあるにあるあ〳〵むみづうちはかはあるこゆ
ゑは艫ゆつうとは松江をたるものなりしるゆきをいと大
なる河ありて是はせど紀枝の絲ちかきとつるはたらるを
ちくこゆさとどちくうるかくを行とゆひさくるにはるあるたしだ

わやふうびたづわうりにわうりあ書るそく杵綠はは里乃大名牟
平ちとつまちなるきちかうを屋とうにゆく岸部はちはごこにあ〳〵む
かとはやがうりとか極てちぐあるさつるのなればいでとうくてはひ
絵いかづさあるとく
廿七日雨ふるこ魚芝隆といふ人とうびとりて泉てまあ〳〵日きげ
そのとべきことを長谷川のながくつて言とはちがくはちて紀
ゆゑあるまだふりきは三魚はきを八一とせみやこにまりあひ山ゑ
あるとて高島ごかりはちをみうに来とりて待うかと相久めくだく
〳〵なるどこをおこなひてあるとつるにはみはちのとてその弟うう又
おこせくようだてうりてあるはそはにうくるとりに
そんとこにすべとあ海まつ西屋とあはとてはてあるう

天かれとうみてえ[illegible]せたのち八きよりの人ども多くあつまりてかぞへ
ぜざることせけ者なりきりて後もわが松ちやとともひ来れば
してきてこれをいだしてこれをかこひ人とするてあん
廿八日 雨ふれば梅はやのわうど清をチ象ちやどらとを西らとり
てうちこびの心いれよりいでてみゆるゆゑにあがりぐもはつ今はうあつめ
て西やうにきてかたびかとにたかとうけいづきうれハなくものかゝ物
えかぞへつくさびわるゞ
おけてこて毎月ろろ人ハ考らるもわうかゝつあるこれこうとを
とぞいつしかのまこ
おのの花のうち考をとうせや梅はは屋のうめようつなが松のうち枝さ
ゆなんあるとけるゆをとゞハ終ちは屋の友のあるゞ中こもてしくわゞ

松はやをとゝひきくまれびのうたてふたうかうちかうこに
どうゞうの思ひてわまびかくうみかをやうなんうれおをやどうて
かるまこもゆ小給お園遠藤人めゝハもかゞび部こてたいめん
おはゞいよゝへゞとうみかゝとをたうとびてうこれくはもやを
そうてちはうるまうゞとまちこひわうとやうにをびくこひ
れこゞうまゝと今ハ山ちはは人となるめるハあ人あるとちくく
かあゝくなんをはゆのうをだるをうゝんを文隆してなうり
くれとをたこ
廿九日 おゝゝもう長くうなしゞ妙見とうあゝゆゝ小あゞとおこ
ちうゆ妙くさこづとうあゝくをちうゝ山給こうゝおも
あまうこを紀こう

こゝ社もまうでゝこゝらくらかりしはかくれぬまであそびて
ゆふかけてかへるたびくはかくしあるになんいとふかき心ありて文
ゑうすさむ社のこさむくなるぞかくは見おとるおのが
言の葉をかゝりおくれなることどもを思ひさだめてさでしあるらび
社務の心やりにはすぎしかまへてつくれるもぞいとゞうるはしき
やしろも年をなりやいよゝ神さびて神ざは繁とこそやはなりて社
あたらしいまいらする神を淤美豆奴命とも申すなるぞみわ
かへはハタぐわるなるぬ
三月朔日くするは拝殿はみやの御家になんわたらせ給ふだ
ありてからうちあまたはもみのこゝにら矢をちまうりまうて
がひて文珠より瑪瑙板をうち折なしゆくものゝうつたしてあいせく

さまたなるをはじめとしてうねびにいつきまつる矢しておほと
大なる御ともぞいつる年は時より千家国造はまうでこゝ奥
神殿は上官は人かずの人のさぬきてうちまうりまうでひゆくつぼ
くとを人まうけのさかまつりあそびて見る奥なる宮ありてけしと
のぼりをとりにゆのくまさしゆみけ何くれとひろく宮柱まとり
机をおきなてゝそのまどゝひろうりこそは御饌奉らりそこらの
かざしまびくまる人もちはのをかにてまゐつうなてまてのぼる
宮島もあるべきる人かつまきでまうのぼるおほみまどをひらかまし
に詠服とのそのはまいろはさしぬきの袴をき大神は
御前は次はそにいりてかへまとる正帳は麻乃とさぬ
小袴とてあがしはきをまつゐのこむひそり御の冠赤鍾乃

里人すなはち上官ぬし人ハおほかまへにまゐてさゝげまゐらせけ
こたみさくらおさめたてまつるとおくりといふすなはち両脇
再拝して八ひらてうちあそびてよむその祝詞

八雲多都出雲國乃八百丹杵築宮尓
静坐須言久綾尓恐支大國主大神
御前尓長門守従五位下大中臣藤
井宿祢高尚鵜自物頸根衝抜天拜美
恐美恐美毛申久幣帛献良武波是乃年乃
年己呂思賜倍不参怠止在都流罪波免
賜倍奈太毎賜天倍今如此大前尓侍布者
喜加母悦加母尊加母恐加母大國主大神波幽

事乎治賜倍誰之人毛尊比齋比祭
流倍神者此大神乃尓奈然有故尓出雲
路乃重流山乃石根踏美参出来天木
綿疊捧持弖献利由貴乃御酒御贄乎
齋机尓置称辞竟奉奴利此事乃與之乎
祝部等茂杵中取持氐申賜倍登申

国造千家ぬしも御前にありて祝うたまふさまを見れバ又上官の
人来て祝詞をよむおりてかはりよまはれしことわりみるく
ごとく御前にあれハ上官衆とはしらぐべくとありて称しける
みやつこの見る御子のひいでたる度のしるしてとかくさるける
ぬいのこれなどよめつねのとくすこしあやなりさてぬちる神

わざおやうまでかうげをとてかくびく人さへにそ国造はおもとにさく
おりしはみさたべく出て長谷川寺がしは家にゆくこころみは
れのかさりげをのこるの此人とりつぎ入てあとくる上宮にちけてあおこ
なひきとぞおはしるびの家にゆてゆくまなんぞはまゐりけい
みじなるをのえし物言がさられあまに出てかたらひけすむへいし
やる人もはらなげあらび思ひいつぬくるわくあはじす故にかけく
かへるにはの家とくへはおもひしらるを今のさきをとる國家のやうる
ちりきふ佐つるさいえびたる天照よちたたつしのをといひけんやうに
たまくいあしらなん末くは社の是し全く多く何くまのむすぶこ屋敷
あらびみるをとは三重ありて玉垣三づ垣わくぞ記といひあはくと文政は
十とせとのひさく一とせと文をかぞへゆくむるこゑくいらあるよ記わりしたり

あまるむけはかく年ころは稀ひとけなるらず
二日 けふはみまつりは八小島国造の家まうであれど御つとの儀
式きのふに同じときけば又ゆび日は法彌は社まうあるくがい山路
さらし遠しと人はいへばよけまゐあしくみのかこきをなりり
かとて足ちは小舟にのりて川を傳ひゆく
かはみえくと見るかぎりまでも流あおく田はのいよ記日にさかゆれ
やのよをりし大なるを水まうくべうちとなくづらにかなん傳るとかよ
せのわたりは見ゆまへお留はは八束郡稀どけるむわあむかさ
へはへ人のいふをきいて
いまへは神のやしも八雲の神にちてむむ神のとりる[る/ゑ]究
づくしはてゆくたつをはいそかのたてるすぐるあなるとはこく

なるやしろあり

　しら浪のかゝるいそべはわらふこゝは夕しろにほとあはじしまみゆ

おもふあはれなくもくゞにつきてかりぬこゝはわがよりにともの便りあめ
きゝとりてゆくむらのみなとは今しろきまうでとゞむるへさの舟路も
やすらけきなまさりや沖をつきてそこらの浜はまほど語をゆきて
ゆきて杵築の里にいたるところは小部らちにむつまじげなるわたり
なる所あめる垣にうつろかけてかしこたりうつ国の物語よかりさる
見てなほをやおもの思ひあはせられきいさしくほどくれつきにけし
つきてやどりにつく里ぬれはおうこゝ路よ浪なけまだこそちひさき舟
にのりてひろき海をこぎいでつゝいとあやふくなん

　わらぶこゝは神はさゝれしあらむなれ小舟に浪よするを秋きゆ

やゝ思ひいづるにおそろしくこそひと文子部はとくとくといひて枕よする
までそのがたりす

三日あしたいちはやんとするに御家をゞみて幸くうるにて来あひ
さける文述をわかるは人をまつてそのがたりをはちさげひ来つるをのこ
ば、おのがちりにうかゞこへまかりしにやる小鳴は小ばくて千部は
まうずる事をさゝげぬ人ありてさせて酒すゝめてよろこばせてまつ

四日杵築をたちいづ里ゆきたるてまでこいろきおくりひかへす
さるにいとやむなかしくひくる人とうちつれて物がたりしありきむ
ほとゝなくほゞ行てみちもそくお宿申などし国人たちの幸くなるむ
乃心くばりけるぞはじめていさゝてありぬ平田といふ所よりあゆ
みいづさしき山路をわかりて一畑寺といふ寺にいたるくるふ

なかやまびふる

ふるやともいとをづうなる山でしは面ハこれりはあ見うゆ

おうよこうちかうしーはち扇ハ正情がもる人なるとうすぐにてやど

はうりなん

又目おそくそれぬたるに山はこ孫なれば見おゆ扇わ沢山やこはち

松はむしたちはちんうさなたるなかうひくる孫はこぶうみゆこの屋の

本のうに見てかうれをるなどこの、点やうあとかさやこまわ

ようこいひわづといとこはちのおうづおりはやこはこ

といひても形えわーで又

みづうこつーなる山こも神の代こうこう見ことなるあう

まーこいもてあづめとるに雲にかうしてあのこーー大山書といたづ

江てあーこ見こづまーてあるうなーんやく

はづーに見こる人みはる新さゆる世あ比書は大

やはこはうある二ども雨と見るうハたこーあくはこ名たるふ

薬師堂にまうづーこづむこは出雲風土記より見こる葦原社

りて少彦名神とまつるとなんうちにいそ見果びげる神は

いまに社のこるなる佛ハかくうれ少大神いくこ師は神とこも

中べきうあまびさやうにやつ山と世は人薬師佛はやうに仏は

あやまりてあやはたづひいでたつるにこそ寺にかへ山こまりなんと

いへどあるづ志はくはづ山びは時かりはくまはこはる出る大野

なる西光寺はこはの見こーーぢ神の宮べは菴こゆくこる正情づ

まーーたゆこわるこてこまーーひづくーやどかはこなんこやうあるいか

なにがし庭は眺いまくつくりたると見えてやり水のながれ清く
はる木だちをかしく見ゆるありさまなれば中島の松ひとつ
かしこの石のやうなるに火よりおちたるをたるあるじ坊さまる山
ぶしの紅葉心見えていとみやびやかに佛のさまにさらじのさま
なくこゑもして火けきやうにかかげてまねく人をきたるへと絶
づくしたやどりにたなん

みはるけとおもひやどりするやどのうちへくとおもひき姿ぞ
まほみなる

六日いでのおもじらずむ出でたちてゆかむとしてつゐる
たちいでし思ひのおもみのとをみたるへおまけの雲の松のさ
こゑぞする本のなを跡新亭より手と思ひ年と河日のやう給

ち雨のくるしげなるをおもへばかくまゐるにぞあらずわれがくく
してらふべきまでおくるにていふやう船よりて松江のおもむきたり
わするなんたよりすゝめたといひぞく此人あまの鄙にいまてまゐる
おこなふをとりしも風ふきいで海のおもりてちらくとまわればかく
ては舟路あるまじなんとてわれはたゞかちよりゆくに山こえて麓の
いきつくひと姉とかへたるもおもしろく雨ふりいでるかたへの人りいづ
からうなかしむとゆへばいそぐめるも近くしてよきといふ母ぞそなた
このところはじめてみるもなるまま海よりさし出たる山の濤さし続
ぐるやうなるいとおもしろし風ちやくていまだ見ぬゆすりたつ浪のゆる
ありさまそれぬべくおばゆきばかりの宗齋よりおもむくゆくた
さてもなかなかゆきさがてまするもおもてつくにものがたりてやうやう

はぎのはなみちなどにうゑかへたらはなのたりゆゑわたいるる
らるせびからうて山をいでらるとゝめて杉ゐさいたる
七日朝はれぐせうり舟出して茶子をあつらへるつゐあり多
城はあるう見あるく出あひだるのお国ゐさてらにやどる
八日大山にはぎゆゑんとゝちぎゆゑて山路からほうこうへあるう
稲ごいと言ゝ郡あるところにつゐ抜ぐ雪はふゐは三尺ぐらなり
いうゝうさむくぞありける宗喬ぐもりるけはし寺法花院は
いつくやどる宗喬もおのおのと同じほどに早路は里人りなん
拾ったかゝひるわりしなありさてあるぐはいつくやうう人なる神は
こゝろにまうでたるひしりは今ぞよく待つとあてはいうゝうさむ
く待ぶとゝふげよとおのゝどあ里とゝふこゝろをうちうあゆみたく

かるあはしばさけたるべくあひくたゝるこゝろをたこゝ待ぶばいうで
うはとゝふたにようゝ稲どこゝにかゝゝぞ待るとてかゝゝけ初たるを
わきをまちざけなゝ稲どゝうきゝてのむたにゝうおもか
えびかゝる山里ゝたゝたなる酒ゝなんあひすゝみてたゝる
ふゝとりはなゝび雪ゝりゝゝのかりてゝはそのぼゝ道の狂
三十丁とゝふに神おゝびゝうゝ川ゝゝゝるまゝかゝにあるとあは
ゝうゝ雪はふゝはゝゝゝ忘ばゝうとゝゆ

めづゝゝ紀山は大やゝ世ゝゝわたゝ紀三雪をやゝひゝりも
見る山はかおりてゝかく雪はふゝ紀なんとゝみめぐゝてやゝう
ゝゝくゝるゝゝ所ゝゝつけゝるゝさゝるみなゝゝてすむ
九日濃はちゝうゝわにおゝりて代ゝ屋はゆゝ紀ひゝるはちゝきいゝも

そのてこうるはりこのにはりていとこ浦のこれをかるこ素
あるこる梢どを弾とそれたるこせるやうなる
見いく逆く柳さくくより素の旅くびとうくくたまう
いそげ山こうみのわるたてかこ名りくとりくやりくるを
老はこのわさを社いはこのみなりや根雨はたにかうる絡はは
はくくとかる
十日板とこうてたらいづる名なくくかはどろくくた板城
胡こうせんくくなりけを板并原はうまやをるうう板浦
すかる山はこれ谷はこと見あげこあるくくはりこのいはるを
くて弾のるる山をのこどもいるひるといとびはりる名なを
くくくげなり

よるあるを見ぐるくてはぐくすぐはりうぐくるれてぬ
山こちぐんぐはは浦はやとり本はを生いでやわるはわづまぐ
とはりくいづこうあこくかくんといくを思ひおて
たくはは山まぬ人くはあづる絡をこうちこくくきこのを
いひくあこかこはは里くる西のるくるひはは山を見はぐいここきこくはは
花こくくなり
西くこむはこくひはは山こくくるを花はすぐこはのくちにはこくる
たこをやくくやいこは
八重桜こくくあこくくあこ柳こたたくくあこくくすこくくる絡をとりんゆる
山川やくくくりはは山を西にあいやかくくなくくているこをまはたる柳を
枝をたはこくくる花をこくはは山こくくこ西くこはてわくくはこくくくあ

りぞは音のきたなげさよふつりたる柳とらのおほてとふ
せたべくなんられそてみるはの国勝山の里ありいふ也　川
ちかた敷にやどる面にそよ水音といふみじ
　はくくべりたるもなうとぬ川音のたうたよふは猶んぞさを
なしからうしておけづくになりにけり
十一日　わさみする雨ありとの時ざかりになるぶりめくをねてより
川舟にのりてゆく
　のぼりゆる悲のはなれどものの乃や激の船ぞしづさるら
なたは舟におのがきをのせし人たり清水並城が弟子なる宗
あむありてありるるびさくさうてとの心ともゐるどするをいろくし
川くゆくほどに西川の里ありつきてありぬそのとひしいふはの人ありて

その庵をかへ見おのれく堤の春に勝山のやどりのりる川迎
くいとくしたるのを家の浪のひびたりおどろかれてもこうとひへ
すうらしうち錦するやうなり
　わきまりた水のおとをきたなれてもとろとめし夢
ぞ見えはる
十二日　あるがのよねまでとのつひきいのるするしてけは
わが庵ありし人のなんといふみく舟にのるさてゆくりひびき
みざりの山く花ふれちるもなぐりかすめる梢わさみざ
あまりの大山の雲とわ舟へは乃ろなるまとは日ハち那
ざりくはまうくるのくじ見ゆ仙ぞとまちそいんあろく
うら絶しておろしうなんちひきたる舟にさゆをやうしもひきあろう

けざやかにたちわたりて岩浪たかくくだけ来
るぞうち驚かる

大づゝにあらぬ舟はいださんはわたりのなみは
ちりてぞありけるあさ霞のむらくて見ゆるやまかほは
舟もえゆきさやうでさへはちしわづかにそらとかく
してゆる時なりきそばそちらくちの見ゆる城のあたり
なり行く

遠路川の坂路は此あたりは松山の並木や
まもるしと思ひ見つゝ越しありて志れる人はなきゆきさて
志ばしやすらひわがなはなにありといづくともしらく日くれぬ
こよひはこゝにとまるといひて知るなき人にまかする松乃やに

かへりたるは日のくれ川といふの

松齋藤井高尚志

白樂園經亦堂氏圖書

松屋大人著

玄恵法師歌論 全三冊

此ふみ法師が通説の道文ならず通ぜ大ぶれを
もちくゆるに解さらんもひとしなべきてうた
よみ文かなを思ふむ人かるべきたまものべき
聞要ぶきなり

同大人著

松乃落葉 全五冊

此ふみ落葉ちなれば世人の和歌ならんこと文ぶきを表
なれば編れるもたゞ素ごゝろ又ふみ文有職ゆゑ儒
佛ぶきるびの心ゑとゝもやゝ和てゝ面へ物ゐ心ゑ
法ぶきゝ実にて和漢ぶきを文ゐあゝ人のゐ面ひてゝ心ゑ者ゐ

文政十三寅年春上梓

京阪書林

京錦小路室町西入 城戸市右衛門
大阪心齋橋安土町角 岡田儀助
同 南久太郎町南入 山本長吾衛